

## 第9章 家族・人間関係について

永田夏来（兵庫教育大学）

### 9-0. はじめに

本章では家族に関連する調査項目（問12、F2、F5、F6、F24）の中から世帯構成と既婚者の状況を中心にF2、F5、F6を用いた検討を行う。

### 9-1. むつ・おいらせにおける世帯構成の特徴

まずは世帯構成人員数からみていこう。利用する変数は「F5：現在あなたは何人暮らしですか。数字でお答えください。（同じ世帯を構成する人数）」である。世帯構成人員数は同居している家族の規模を示しており、これが多ければいわゆる「大家族」となり、3-4人ならば「核家族」、1人ならば「独り住まい」との見取り図を得ることができる（なお、今回調査は若者を対象としているので高齢単身世帯について考慮する必要はない）。おいらせ・むつの世帯構成について、図1、図2に世帯構成人員数を棒グラフで、累積パーセントを折れ線グラフで示した。

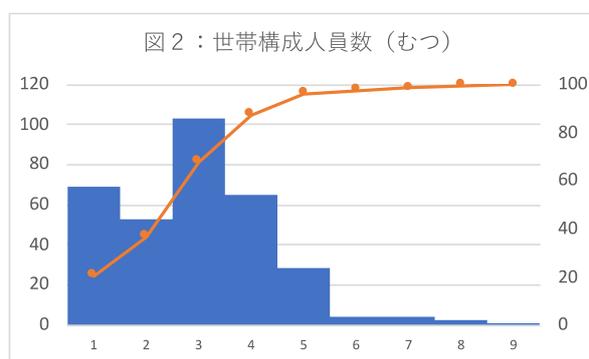
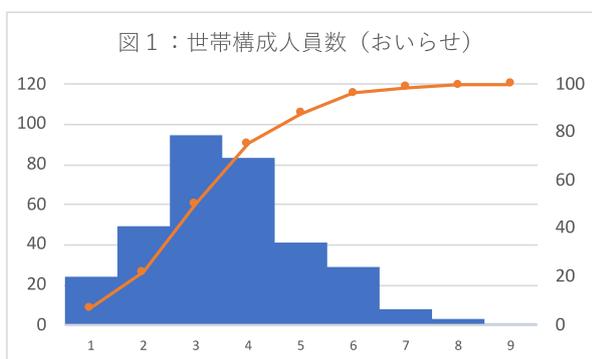
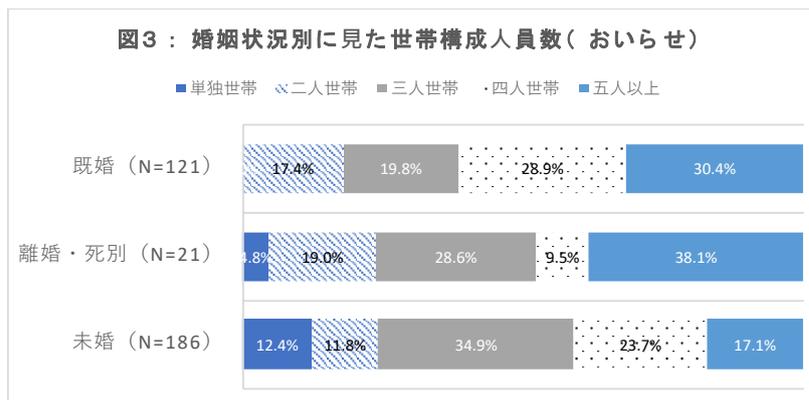


図1・図2にあるように、おいらせとむつにおいて最も多いのは3人世帯だが、おいらせでは4人世帯、むつでは単身世帯が2番目に多くなっている。特に、むつにおいては単身世帯が4人世帯を上回っていて、おいらせに比べてかなり「独り住まい」が多いとの特殊な状況が見えてくる。若者を対象にした本調査において、3-4人で構成される「核家族」世帯とは1) 回答者が夫婦と小さな子供からなる「子育て世帯」2) 大人になった回答者とその両親からなる「親同居未婚者世帯」の二つの可能性があるだろう。この点について、次項で確認しておく必要がある。また、おいらせでは5人以上からなる「大家族」が2割以上程度みられる一方、むつでは全体の8割以上が4人世帯までにおさまっている点も押さえておきたい。まとめると、おいらせとむつ両方で最も見られるのは「核家族」世帯であること、また、おいらせは「大家族」が多くむつは「独り住まい」が多いとの特徴があると言えそうだ。

### 9-2. 世帯構成人員数と婚姻経験

今回調査では婚姻状況について「F2：現在、あなたは結婚されていますか」で尋ねている。おいらせの婚姻状況は、男性（n=154）で「結婚している」39.0%「離婚・死別した」5.8%「結婚したことはない」55.2%、女性（n=174）は「結婚している」35.1%、「離婚・死別した」6.9%、「結婚したことはない」58.0%となっていて結婚経験を持たないものが最も多い。むつも同様に男性（n=181）で「結婚している」40.9%「離婚・死別した」5.5%「結婚したことはない」53.6%、女性（n=148）で「結婚している」39.9%

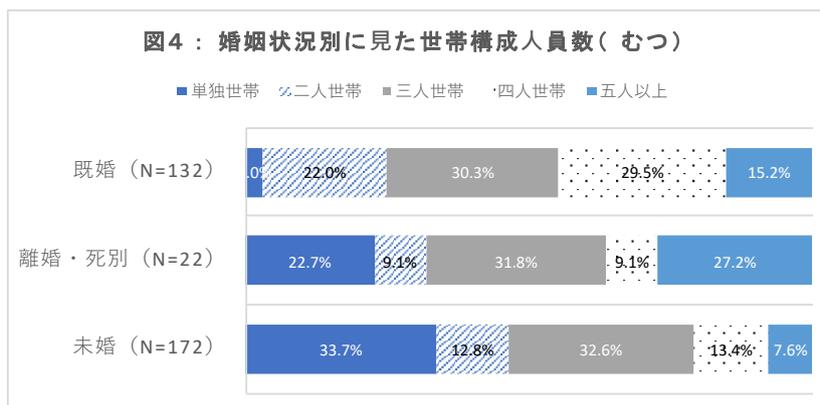


「離婚・死別した」8.1%「結婚したことはない」52.0%と結婚経験を持たないものが最も多い結果となった。

これらの結果を世帯構成人員数と検討した結果が図3、図4である。おいらせにおいては既婚、離死別に「大家族」が多く、五人以上世帯にすむ既婚者は30.4%、離死別は38.1%となった。結婚経験を持つもの（子供を持っていると想像される）の多くは親と同居している可能性が示唆されたといえる。未婚者は3人世帯が34.9%と最も多いが、1割以上の「独り住まい」を含め、様々な規模の世帯で暮らしていることがわかる。むつにおいては、五人以上の「大家族」で生活する既婚者は15.2%、離死別は27.2%となっており、おいらせと比べて既婚者世帯で15ポイント、離死別10ポイント程度、それぞれ少なくなっている。未婚者は「独り住まい」が最も多く33.7%となっており、おいらせを20ポイント以上上回った。五人以上の「大家族」は7.6%となっており、おいらせに比べて10ポイントほど少なくなっている。

国勢調査によれば、青森県における単独世帯および二人世帯は平成7年（1995年）調査から平成27年（2015年）までの間で増加傾向にあり、逆に4人以上の世帯は減少傾向にあることが指摘されている。この傾向は一般には高齢化の影響（お年寄りの「独り住まい」や「夫婦暮らし」が増加した結果）とみなされることが多い。青森県の場合、女性の単独世帯については高齢化の影響として理解できるが、男性の単独世帯では20～24歳が26.4%と高くなっている点が他県とは異なる特徴としてしばしば言及されるところである（青森県企画政策部統計分析課, 2017:p7）。

本調査では男性の未婚単独世帯は無配偶（「結婚したことはない」と回答したもの）のうち、おいらせ（n=94）が14.9%、むつ（n=107）が40.2%となった。20歳代だけを取り出したわけではないので厳密な比較はできないが、むつの無配偶男性における単独世帯が多くなっている点に留意が必要だ。未婚者の分析は次章に譲るとして、本項では「結婚している」とした有配偶者の同居状況について概観しておきたい。



### 9-3. 有配偶者における親との同居状況

「結婚している」と回答した有配偶者の同居状況はむつ・おいらせでどのようになっているのか、以下で見ていく。使用した変数は「F6A：A自分の父親 F6B：B 自分の母親 F6C：C 配偶者（事実婚、婚約者を含む） F6D：D 配偶者の父親 F6E：E 配偶者の母親 F6F：F 自分の子ども（長子）」である。ただしこのデータは統計的に有意であることが確認できなかったため、参考程度のものである。

まず配偶者との同居状況について見ておこう。おいらせにおける有配偶男性（n=60）のうち96.7%、有配偶女性（n=61）のうち93.4%が配偶者と同居しているとしている。むつも同様に、有配偶男性（n=73）のうち91.8%、有配偶女性（n=57）のうち89.5%から配偶者と同居しているとの回答を得た。「1時間以内に行ける場所に住んでいる」という近居、「日帰りできる場所に住んでいる」「日帰りできない場所に住んでいる」という別居が男女ともにわずかながら存在しているが、基本的には配偶者と同居している者が多数派と見て良いだろう。

次に長子との同居について見ておく。おいらせに住む有配偶男性（n=59）のうち最も多かったのが「長子と同居している」の74.6%であり、ついで多いのが「該当する者がいない（=子供がいない）」の22.0%であった。有配偶女性（n=61）も同様に「長子と同居している」が78.7%と最も多く、「該当する者がいない（=子供がいない）」が19.7%で2番目に多い結果となっている。むつにおいては、有配偶男性（n=73）のうち最も多かったのが「長子と同居している」の69.9%であり、ついで多いのが「該当する者がいない（=子供がいない）」の21.9%であった。有配偶女性（n=59）も同様に「長子と同居している」が69.5%と最も多く、「該当する者がいない（=子供がいない）」が30.5%で2番目に多い。なお、むつの有配偶男

性において、子供と別居および近居が8.2%となっている。

まとめると、おいらせ・むつ共に基本的には配偶者と同居、子供と同居のパターンが最も多い。細かくデータを見ていくと、おいらせ、むつ共に男性よりも女性に別居・近居が多く、男女ともにおいらせよりもむつに別居・近居が多い。これらを総合すると、むつに住む有配偶者には夫が単身赴任をしている者が多いという可能性を考えることができるかもしれないが、有意差が確認できないので可能性の言及にとどめておく。また、若者を対象にした調査であるため子供がいないケースが一定数いる様子も見えた。

続いて、親との同居状況である。表1から表4で「自分の父親」「自分の母親」「配偶者の父親」「配偶者の母親」との同居について示した。

青森県に住む30-34歳の親との同居状況を国勢調査でみると、既婚男性では平成21年(2009年)12.0%が平成27年(2015年)には10.0%、既婚女性では平成21年(2009年)12.8%が平成27年(2015年)には10.8%とわずかながら減少傾向が見られているものの、およそ1割程度であることがわかっている(青森県企画政策部統計分析課, 2017)。今回調査とは対象年齢がややずれるため厳密に比べることはできないが、おいらせにおいては「自分の父親/母親と同居している」とした者が男性で15-17%、「配偶者の父親/母親と同居している」とした者が女性で15%程度いることから、夫の親と同居する夫方居住が青森県全体に比べて強い傾向にある可能性が示唆されている。むつにおいては「自分の父親/母親と同居している」としたものは1割程度で青森県全体の水準と合致している。しかし父親と同居する娘がやや少ない結果となった。「自分の父親」「自分の母親」で数値が異なっている点については、配偶者と死別・離別した親が子と同居する途中同居の影響が考えられるだろう。「配偶者の父親/母親と同居している」はおいらせ同様女性に多く、夫方居住の様子を示唆している可能性がある。また、おいらせ、むつにおいて男女ともに最も多いのは「1時間以内」の近居となった。

表1：自分の父親との同別居（有配偶）

	おいらせ		むつ	
	男性 (n=60)	女性 (n=60)	男性 (n=74)	女性 (n=58)
同居	15.0%	5.0%	10.8%	3.4%
近居（1時間以内）	<b>45.0%</b>	<b>43.3%</b>	<b>43.2%</b>	<b>41.4%</b>
別居（日帰り可能）	8.3%	13.3%	10.8%	10.3%
別居（日帰り不可能）	13.3%	16.7%	14.9%	25.9%
その他	18.3%	21.7%	20.3%	18.9%

表2：自分の母親との同別居（有配偶）

	おいらせ		むつ	
	男性 (n=60)	女性 (n=60)	男性 (n=74)	女性 (n=58)
同居	16.7%	11.7%	10.8%	12.1%
近居（1時間以内）	<b>51.7%</b>	<b>56.7%</b>	<b>52.7%</b>	<b>51.7%</b>
別居（日帰り可能）	15.0%	13.3%	14.9%	17.2%
別居（日帰り不可能）	13.3%	11.7%	14.9%	15.5%
その他	3.4%	6.7%	6.8%	3.4%

表3：配偶者の父親との同別居（有配偶）

	おいらせ		むつ	
	男性 (n=59)	女性 (n=60)	男性 (n=73)	女性 (n=58)
同居	0.0%	15.0%	1.4%	6.9%
近居（1時間以内）	<b>50.8%</b>	<b>45.0%</b>	<b>46.6%</b>	<b>43.1%</b>
別居（日帰り可能）	20.3%	8.3%	28.8%	10.3%
別居（日帰り不可能）	15.3%	8.3%	11.0%	13.8%
その他	13.6%	23.3%	12.4%	26.2%

表 4：配偶者の母親との同別居（有配偶）

	おいらせ		むつ	
	男性 (n=59)	女性 (n=60)	男性 (n=73)	女性 (n=58)
同居	1.7%	15.0%	2.7%	8.6%
近居（1時間以内）	<b>61.0%</b>	<b>51.7%</b>	<b>50.7%</b>	<b>46.6%</b>
別居（日帰り可能）	18.6%	11.7%	30.1%	13.8%
別居（日帰り不可能）	11.9%	8.3%	8.2%	17.2%
その他	6.8%	13.3%	8.2%	13.8%

大和礼子は「父のみ」および「父母」からなる「父を含む同居」において、夫方居住は拡大家族の伝統がある地域に見られること、妻方居住は妻がフルタイムで勤務しているなどで親からの支援が必要とされている場合に見られることを指摘している。これに対し、「母のみ」の同居は、母親が無配偶であるなど、親の方が援助を必要としている場合が多いと大和は言う（大和, 2018）。西南日本は核家族が多いが東日本は直系家族を背景に「大家族」が生じやすい状況と合わせて考えれば（小島, 1997）、夫方であれ妻方であれ、親からの援助がなくては生活が成り立たない状況が若者世代の同居の背景にあり、直系家族の残滓と共に親の権威が保たれやすくなる可能性があるかもしれない。この視点からの分析が今後必要となっていくだろう。また、大和によれば、夫側親との近居の理由は同居とそれほど違いがないが、妻側親との近居は子供側の収入よりも育児などの支援のニーズによるという。子育て世代を対象とした本調査においても、おいらせ、むつ共に「配偶者の親」との近居は男性に多く「自分の母親」との近居は女性に多かった。これらのことから、近居の背景として妻側の育児ニーズがあることが推察されると言える。

#### 文献

- 青森県企画政策部統計分析課, 2017, 『平成27年国勢調査世帯構造等基本集計 青森県集計結果の概要』  
 小島克久, 1997, 「我が国の世帯構造の地域差-都道府県別データを用いた分析:1980-1995-」『人口学研究』21日本人口学学会  
 大和礼子, 2017, 『オトナ親子の同居・近居・援助:夫婦の個人化と性別分業の間』学文社